

レイプ神話受容のメカニズム

：歪んだ認知に着目して

○漆谷紗耶¹・森永康子²

(¹広島大学教育学部 ²広島大学大学院教育学研究科)

女性の性犯罪被害者への非難は男性だけでなく女性にも見られる。被害者非難が生じる原因の一つに「女性は本当はレイプを望んでいる」といったレイプ神話と呼ばれる信念(Burt, 1980)があり、男女ともに持っていることが報告されている(e.g., Aosved & Long, 2006)。Papp & Erchull (2017) は、女性がレイプ神話を受容し、被害者を非難するのは、自分も被害に遭うかもしれないという不安を解消するためであるとしたが、実際に不安を測定した検討は行なっていない。本研究では、レイプを描いたシナリオを用い、喚起されたネガティブ感情を解消するために、被害者非難を行うのかを検討した。被害者と自分が類似していると思う女性ほど、また、レイプ神話受容度が高い女性ほど、被害者非難を行うことが予測される。また、男性の場合、「男らしさ」の証明のために女性に対する暴力が用いられると考えられている(Bosson & Cohen, 2008)。そのため、男らしさが不安定な男性ほど、レイプという性加害行為を正当化する、つまりレイプ神話を受容することが予測できる。

本研究では、レイプ神話を性犯罪被害者への不当な非難につながる歪んだ認知とみなし、レイプ神話受容及び被害者非難に至る男女別のメカニズムについて検討する。

方法

参加者 大学生 118 名 (男性 67 名, 平均年齢 20 歳)。

質問紙構成 男性：不安定な男性らしさ尺度(6項目)を始めに回答し、シナリオ提示の後で、ネガティブ感情(11項目)、被害者非難(2項目)、加害者非難(1項目)への回答を求めた。その後、自尊心尺度(10項目)、フイラー項目(10項目)、レイプ神話受容尺度(20項目)への回答を求めた。女性：シナリオ提示の後でネガティブ感情や被害者・加害者への非難を尋ねた。その後、被害者との類似度(2項目)を尋ね、他は男性と同様であった。いずれも 5 件法。

シナリオ ある女子大学生が友人の男子大学生からレイプされたという架空の事件を描いた。調査参加者の意見が偏ることのないよう、なるべく事実のみを記述するようにした。

結果と考察

男女比較 被害者非難($\alpha=.78$)は男女間で差が見られ

なかったが、加害者非難は男性よりも女性の方が有意に高く、レイプ神話受容度($\alpha=.87$)は女性よりも男性の方が有意に高かった($ps<.05$)。

女性の結果 ネガティブ感情と被害者との類似度($\alpha=.67$)に有意な相関が見られなかったため、分析に用いなかった。被害者非難を従属変数、レイプ神話受容度とネガティブ感情($\alpha=.90$)及びその交互作用を説明変数とした重回帰分析の結果、交互作用とレイプ神話受容度の主効果($ps<.05$)が有意であった。また、レイプ神話受容度低群(-1SD)において、ネガティブ感情が高いほど被害者非難も高かった(Fig1)。

男性の結果 Fig 2 に示すモデルを共分散構造分析で検討したところ、不安定な男性らしさがレイプ神話受容を高めることで被害者非難につながるが、ネガティブ感情と被害者非難に関連は見られなかった($\chi^2(2)=2.17, p=.34, CFI=.99$)。

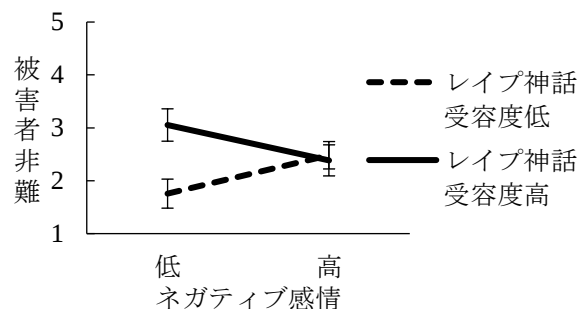


Fig 1. 女性参加者における重回帰分析の結果

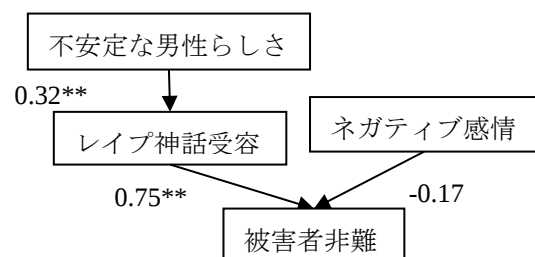


Fig 2. 男性参加者における共分散構造分析の結果

考察

レイプ神話受容度が低い女性であっても、レイプ事件に触れた際に喚起されるネガティブ感情(自分も被害に遭うかもしれないという不安とは異なる可能性が高い)を解消するため被害者を非難する傾向が高まり、男性は不安定な男性らしさを持つほどレイプ神話を受容し、被害者を非難すると考えられる。